

屋根壊して中風の病者を吊り下ろす場面は、多くのキリスト者が知っている(マルコ 2:4)。マタイ福音書はこのマルコ福音書の記述を手本にしながらかも、吊り下ろしの場面は記していない。病者当人ではなく、彼を運んで来た人々の「信仰」に心動かされ、罪赦すところは同じだが(マルコ 2:5,マタイ 9:2)。

じっと読み、あれっと思うのは、「すると(マタイ 9:2)」とか「ところが(9:3)」と接続詞のように訳された言葉。「信仰を見て(9:3)、群衆はこれを見て(9:8)」と同じ、「見る」という言葉だ。

武骨に「見よ、人々が中風の人を～(9:2)」、「見よ、律法学者の中に～(9:3)」と訳した方がいいんじゃないか。そう訳すとどうなるか。映画のようにその人の顔がアップになる。視点は定点ではなく、手持ちカメラが各々にググッと迫る感じだ。そう読み、想像すると、登場人物の姿がいつそうダイナミックになる。

「(見よ)、人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れて来た(9:2)」。イエスはすぐさま「その人たちの信仰を見て(9:2)」、中風の人に「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される(9:2)」と優しく語りかけた。

イエスの心に、人々の信仰に心動かされる何事かが起こった。それを「見よ(9:2)」と福音書は示す。人々とはどんな人物か。分からない。病者の痛みを我が事とし、快復が望めない中風の治癒を必死に願う人々ではある。「信仰」とは、素朴に、こういうことなのだろう。

「信仰」の権威たる律法学者も居合わせていて、これに悪感情を抱いた(9:3)。イエスはそれを察して「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう(9:6)」と述べ、病者を癒して家に帰した(9:7)。

「人の子」とは、旧約では神の民のことだが、イエスが「人の子」と言えば御自分のこと。この地上で、限界ある一人として生き、人と人のおられ、人々の喜びと苦悩を味わったからだ。であるのだから、「人の子」という呼称の領域を、もう少し広げて考えてもいいのではないか。

人の子イエスが病者を癒した(9:7)きっかけは何か。人々の信仰を見たから(9:2)。であれば「人の子」の働きには、人々の信仰も含まれているのではないか。

人々は、病者の苦しみや不安を我が事とし、彼を懸命に抱えて来た。その「信仰」ゆえに、イエスは病と罪を御身に負い、その人を解き放った。

人々は、無自覚なまま十字架の一部を負っているのではないか。それが「信仰」なのだ(9:2)、と。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい(16:24)」。

「イエスについて行く」とは、出家するのも、自由を手放すことでもない。己が十字架を負うこと。

己が十字架とは何か。あの時、あの人々の十字架は、中風の人の痛みを我が事とし、息を切らしながら必死にイエスの許へ連れて行くことであった。それが「人の子」の働き。

イエスが中風を負い、病は癒された。「地上で罪を赦す権威(9:6)」とは、キリストと響き合う人間の「十字架」ではないか。

「神は天から人の子らを見渡し、探される。目覚めた人、神を求める人はいないか、と(詩編 53:3)」。

「神などいない」という混沌の世に(53:2)、神は「人の子」をお遣わしになる。教会という「キリストの体」を構成する者は(1コリント 12:27)、兄弟の病を我が事とする人の子(12:26)。奇跡とは病が癒されることではない。病という痛みのただ中に、キリストと響き合う人の子が現れることなのだ。



#### 《おまけのひとこと》

すべて神任せにして無力という惰眠にあまんじる なんとか自力から解き放たれ キリストのみに辿り着くとすでに腐りかけている どこへ進み往くのか あらゆる境界すれすれを歩いてみるかな